

# より良く生きる — 出居清太郎先生の世界 — 第8回

山本博也

## 難有って、有難い

人生行路における「難」は苦しく辛いものでありますが、その「難」によつて

境を打破していく勇氣を持って、心を強く正しく、明るく清らかに前進せよ——といのちの親がこの「難」を与えてくださった、この難関を突破することによつて「力」が授かるのだ——こう悟っていかなくてはなりません。

(出居清太郎先生の言葉から)

かなる「難」をも克服していけば、結果として「有難い」ことになつてまいります。ですから「有難い」という文字は「難有り」と書くのであります。難有つて有難い、文字通りであります。苦しい「難」に遭つたことをなげかず、どんなに苦しくとも迷わず、この苦

先頃行われた北京オリンピックでは日本の選手たちは大活躍でした。カーリング女子もその一つで銀メダルに輝きました。表彰台に立ったのを見た時、金・銅の選手たちに比べて、彼女たちがなんとも小柄で、よくやったもの

だと感じたものでした。

10チーム総当たりの予選リーグで日本は5勝4敗でしたが、かろうじて4位となり準決勝に進出しました。そこで、予選リーグを8勝1敗とトップで通過したスイスを破ったのでした(予選リーグでは日本は敗れていました)。

その試合後の勝利インタビューで選手は次のように言っていました。

「私たちは予選リーグでたくさん失敗をし、苦しい場面にもたくさん立ってきました。それが生きました」と。

このように、困難に出合ったとき、それを克服すべく努力をすれば、いい結果が得られ、自分に力がつくということとは、誰しも経験していることで、人生の真理だと言えるでしょう。



カット 大西 恵

ただ人は、経験から得た真理をすぐ忘れてしまい、別の場面になかなか応用できません。そこでこのような真理を「難有って有難し」といった普遍的な言葉としてメッセージ化してくれたのが聖者の教えだともいえるでしょう。

私たちは、このような聖者の教えを、心の中に定着させておくことによって、新しい難に直面した時、あわてたり、おちこんだりせず、明るく、元気に対応

することができません。

些細なことですが、この原稿をパソコンで作成していたとき、一ページほどが消えてしまうということがありました。あーあと思いつながら、再度打ち込む過程で、前よりもいい文章を思いついて、怪我の功名、これも「難有って有難し」でありました。

このたび、外国の軍隊から突然の攻撃を受けたウクライナの皆さんの難はいかばかりでしょうか。報道で見聞きする、人々の惨状には心が痛みます。

これでは人々の心に、怒り、悲しみ、恐怖、憎悪、絶望……が渦巻いて当然だと思います。

それでもなお、「難有って有難し」なの

でしょうか。

そもそも「難有って有難し」というけれど、難それ自体が喜ばしいこと、歓迎すべきことではないと思います。難だけれども、そこから必ず良いこと、有難いと思えることを生み出せるのだということではないでしょうか。難の中にあつても、明るく元気に、前進していけば必ず有難いと思えることが出てくるのだという希望ではないでしょうか。

考えてみれば、日本でも東日本大震災もありましたし、阪神・淡路大震災もありました。私たちの父母や祖父母はかつて空襲の中を逃げまどつたのでした。その中をみんな生きぬいてきたし、現に生

きておられます。出居清太郎先生は、爆弾を落として帰っていく敵機に向かって、防空壕の中から「ごころうさま」と合掌されました。

各地の震災を取材し、また被災者の支援をなさっている、精神科医で作家の野田正彰さんは、次のようにおっしゃっています。

「地震は大地の断層を可視化させてくれるだけでなく、人間社会の矛盾を裁断して見せてくれる。その社会の断層のなかに、災厄を耐えて生き抜く人の美しさが光っている。」（高知新聞2月28日）  
「難有って有難し」は、難の中でも美しく生きるための希望であり支えではないでしょうか。

出居清太郎先生はまた次のようにもおっしゃっています。（いずれも本稿第2回）

「なるほど厳しい道だ。厳しいが、通れない道ではない。…どのような道も、いのちの親が連れて通ってくださるのである。この道を通ればそこに光がさしてくる。幸せがそこにおのずから生まれてくるのであります。」

「神は親である。ゆえに神は何事も知って、必要なものを神の子に用意してくださっている。」  
これらの言葉もわれわれにとって希望であり、光です。ウクライナの人たちに何が用意されているのでしょうか。

発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1

修養団捧誠会 TEL 03-3971-1493